

# 印伝の歴史

職人の熱意と、粹を好んだ文化の証し

山梨に400年以上もの昔から伝わる革工芸「印伝」。

鹿革に漆で模様を付けたものが特徴で、

巾着などの袋物はその始まりといわれている。

日本に根付いた鹿革の加工技術は、  
やがて「印伝」という、  
一つのブランドとなった



鹿革は軽くて丈夫であり、素材として手に入りやすかったため、日本では古くからさまざまな実用品の製作に用いられてきました。中でも、奈良時代に燻<sup>ゆす</sup>べ技法で作られた文箱(国宝・東大寺蔵)はよく知られています。また、柔らかく体になじむ上、強度もあるので戦国時代には、武将たちの武具・鎧<sup>よろい</sup>や兜<sup>かぶと</sup>などに広く用いられていました。このように鹿革の加工技術は長い歴史の流れの中で育まれていったのです。この鹿革の加工品が、いつ、どうして「印伝」と呼ばれるようになったの

革羽織の多くは燻<sup>ゆす</sup>べ技法が施されている。写真は甲州財閥・若尾家に伝わる山市印燻革羽織  
[印傳博物館蔵]



煙革合切袋(右)・三ツ巻財布(中)・提げ貰入れ(左) [印傳博物館蔵]



印傳屋の記載がある「甲府買物独案内」(江戸時代)  
[印傳博物館蔵]



信玄袋(右・中)と巾着(左) [印傳博物館蔵]

かは定かではなく、インドアの変化した言葉とも、  
印度伝来に由来するといわれるなど諸説があります。江戸時代にベストセラーとなった十返舎  
一九の『東海道中膝栗毛』に「腰にさげたる印伝の  
巾着を出し見せる」の一節があることから、その  
ころには印伝という呼び名が知られていたこと  
がうかがえます。

### 山梨の印伝産業は、 繊細な技と豊かな感性から生まれた

かつて全国的に普及していた鹿革の加工品が、  
伝統工芸品「印伝」として山梨県の地場産業と  
なったのは、甲府市の老舗「印傳屋」の遠祖・上原  
勇七が鹿革に漆で模様を付ける独自の技法を創  
案したことに始まります。最初は撥水効果を目的  
として塗られるようになった漆。漆のひび割れに  
よる表情から地割れ印伝、松皮印伝とも呼ばれま  
した。しかし、撥水効果にとどまらず、漆で美しい  
模様を付ける技法を生み出し、江戸小紋などの絵  
柄を漆で表現した印伝は、たちまち人気を博しま  
した。江戸時代中期以降は庶民の旅も盛んにな  
り、粋を競う人々の間で巾着、貰入れなどが愛用  
品として定着していったのです。

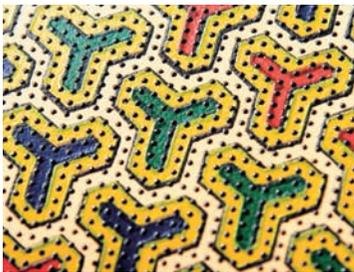
山梨は鹿皮と漆が産出される好条件がそろっ  
ていたことで、産地として栄えていったのです  
が、太平洋戦争で印伝の製造は一時中止を余儀な  
くされました。しかし焦土と化した甲府の地から  
力強く再興し、今日に至っているのです。

国の伝統的工芸品に指定。  
産地としての誇りを胸に未来を描く

昭和49年には甲府印伝商工業協同組合が設立され、業界の発展へ向けた情報交換や、伝統の技の継承と、さらなる向上を目指す取り組みが推進されるようになりました。その後、洋装に合わせたハンドバッグなども生産。ファッションの多様化にマッチする製品の開発も活発に行われ、印伝はさらに人々から愛される存在に成長していきましました。こうして山梨は印伝の産地として揺るぎない地位を確立し、昭和62年には国の「伝統的工芸品 甲州印伝」に指定されました。現在は海外でも高い評価を受けるなど、山梨発の美しい印伝文化は新しい時代の幕開けを迎えています。



## 受け継がれる印伝の技法



さら  
更紗

模様の色ごとに型紙を替え、多色使いの模様が表現できる技法。漆ではなく顔料を使用することで鮮やかな多色模様ができる。色が多いほど型紙の枚数が増えるが、美しい仕上がりのためには少しのズレも許されない。正確かつ均一に色を載せる高度な技術が必要。印度伝来の更紗模様に似ていることが、その名の由来といわれている。



ふす  
燻べ

太鼓と呼ばれる筒に鹿革を張り、わらをたいていぶし、茶褐色系の色と模様を施す技法。鹿革に型紙を重ね、上からへらでのりを置いて防染し、いぶし終わったところでのりを剥がし取ることで模様が白く浮き出る。漆置き技法よりも古い歴史を持つ。現在生産量は少ないが、その独特な風合いは根強い人気を誇っている。



漆置き

漆置きは印伝の最も代表的な技法。染め上げた鹿革の上に型紙を載せて漆を刷り込み、立体的な模様を付けていく。均一に漆を刷り込むには熟練の技が必要。職人が使うへらは自然にくぼみができ、職人の手にフィットしていく。漆は、時とともに色がさえ、深みのある光沢を帯びる。

## 印伝業界発展のために

甲府印伝商工業協同組合は、業界として甲州印伝の普及・啓発、品質向上を含めた土台づくりを目標に昭和49年に発足し、現在4業者が加盟しています。業界をより良くしていくためには、個々の業者がそれぞれの特色を持ちながらも、同じ方向性の中で情報の共有化などをしていく必要があります。4業者という小さな規模だからこそ、意思の疎通が図りやすいといった利点もあり、印伝業界発展のための機能を果たしています。

(株)印傳屋 上原勇七

甲府市川田町アリア201 / TEL.055-220-1660

(有)池田商店

甲府市青葉町9-13 / TEL.055-233-7866

甲府印伝商工業協同組合

中里印伝製造所

甲府市青沼2-19-17 / TEL.055-233-0580

(有)印傳の山本

甲府市朝氣3-8-4 / TEL.055-233-1942



甲府印伝商工業協同組合

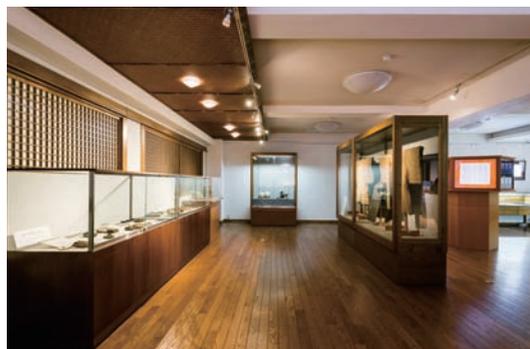
事務局長 上原 重樹 さん

## 印傳博物館



### 印伝の模様「うろこ」が施された 郷土力士・竜電関の化粧まわし

2018年大相撲初場所、郷土力士としては30年ぶりとなる新入幕を果たした竜電関(甲府市出身)。後援会から贈られた化粧まわしには印伝が使用されている。黒地に白い漆を施した模様は、竜電のしこ名にちなんで「竜のうろこ」をイメージしている。うろこ柄には魔よけ、身を守り成長するといった意味がある。



江戸時代以前から昭和前期に至る古典作品の展示や、印伝の技法の紹介など日本の鹿革工芸文化を公開。貴重な收藏品から職人の息遣いや、使い手の愛着を感じながら、伝統の技と美を堪能することができる。趣向を凝らした年4回の企画展も開催している。

住 所 / 甲府市中央3-11-15 印傳屋上原勇七本店2階

T E L / 055-220-1621

開館時間 / 10:00~17:00

休 館 日 / 展示替え期間中・本店休業日

ご来館の際は、あらかじめお問い合わせください。

入 館 料 / 一般200円、小・中学生100円

印傳博物館

【企画展】3月4日(日)まで開催中  
甲州印傳と伊勢型紙 — 精緻な模様 —